

序 世界的概観 27

問題の設定 29 / 量的変化と統計 29 / 地理的分布 33 / 博物館の法的地位  
博物館の創設者 36 / 建設ブームの時代 38 / 博物館建設のダイナミズム 41  
博物館の分化・専門化 42

第Ⅱ部 個人コレクション 三つの誕生物語 45

1 宝物の時代——墳墓、寺院、宮殿 47

宝物と聖なるもの 47 / 宝物庫の機能 48 / 宝物庫の本質的特徴 55 / ギリシャの都市の宝物  
ヘレニズムの王たち 60 / ミューズの神殿ムセイオン 64 / ペルガモンのアッタロス 66

ローマの公共コレクション 68 / 私的コレクションと公開 70 / 博物館のモデル 73

2 中国とローマ——個人コレクションの二重の起源 77

大陸の東と西の帝国 77 / 個人コレクションの誕生 77 / 仮面とアトリウム 78  
略奪と戦利品 79 / 蒐集家の出現 82 / キケロが見たベレス 84 / 個人コレクションの発明 86  
ローマ人の蒐集家 89 / プリニウスとアウグストゥス 91 / 豪華な時代 97  
ローマからコンスタンティノープルへ 99 / 皇室の宝物庫 100 / 神聖化と聖遺物 103

3 キリスト教徒の宝物——金と恵み 107

蛮族の王たちの宝物——キリスト教化とローマ化 110 / ラテン語によるテキストの登場 112  
カール大帝と教会宝物——信仰の輝き 114 / シュジェの態度と行動 118  
コンスタンティノープルの皇室財宝 123 / 第四回十字軍とその影響 128  
カメオとインタリオ 130 / 一〇四年以降のキリスト教の財宝 139

4 個人コレクションの復活 147

シャルル五世とベリー公ジャン——宝物から個人コレクションへ 147  
ペトラルカと人文主義者の蒐集物 153 / ニッコロ・ニコリのコレクション 156  
蒐集家の三王朝——ゴンザーガ、エステ、メディチ 162 / アルフォンソ五世 164 / ローマ教皇庁  
フィレンツェの衰退 170 / コレクション、個人、栄光 171 / 人文主義者の果たした役割 174

### 第Ⅲ部 イタリアの博物館 一五世紀から一八世紀まで

183

#### 5 古代遺物への反応 185

ローマ——博物館の誕生 185／ラテラノ宮殿、バチカン、カピトリウム 190  
シクストゥス四世 193／彫像とベルヴェデーレの中庭 196／異教徒の偶像と裸体像 200  
コモ——偉人博物館 204／博物館という用語の登場 206／「ムゼウム」の適用範囲 208  
意味の変化 212／イギリスの「ミュージアム」という用語 214／フランスの「ミュゼ」 214  
オランダ語とドイツ語の「ミュージアム」 215／ロシア語とポーランド語 217  
最初の美術館——フィレンツェ、ベネチア、ミラノ 218／ウフィツィ美術館 219  
ベネチアのドメニコ・グリマーニ枢機卿 226／フレデリコ・ボッロメオ 231

#### 6 衰退と古代の美術品への回帰 241

植物園、生きた植物博物館 241／アルドロバンディの博物館 250／自然史博物館の誕生 251  
キルヒャーの博物館 252／百科全書的コレクション 258／科学と古代の関係 260  
スキピオーネ・マッフェイの博物館 266／碑名学博物館とエトルリア 268／カピトリノ美術館 273

#### 7 古代美術の勝利 279

芸術の殿堂——ポルティチ、カポディモンテ、ピオ・クレメンティーノ 279  
ポルティチ博物館 282／ヘルクラネンセ博物館 286／カポディモンテ絵画館 287  
クレメンス一四世とヴィンケルマン 288／ピウス六世 294  
ウフィツィ——啓蒙主義が見直した王侯貴族のギャラリー 303／コレクションの法的保護 304  
ペッリとランツィの確執 308／新しい展示基準 312／歴史を語る 315／マンシア制度と入館券 319

### 第Ⅳ部 アルプス越えの旅 一六世紀から一八世紀まで

321

#### 8 絵画と古代の美術品 331

ブルゴーニュ公爵家——宝物と個人コレクションの狭間で 332／カール五世周辺の蒐集家 336  
ブロンズ像と絵画に囲まれたフランソワ一世 340  
スペインのフェリペ二世とオーストリアのルドルフ二世——信心深さと好奇心 348  
ルドルフ二世 354／ヴィッテルスバッハ家——王朝に仕えたコレクション 358  
マクシミリアン一世 359／三十年戦争とヨーロッパにおける美術品の再分配 362

#### 9 好奇心の部屋 クンストカンマー 369

クンストカンマーの特異性——眩惑、驚愕、娯楽 370



クンストカンマー、その理論化——キツェベルク 373  
 カトリック宮廷Ⅰ アンブラス——謝罪と遊び心に溢れた百科事典 378  
 カトリック宮廷Ⅱ ミュンヘン、好奇心から献身へ——プラハ、好奇心文化の絶頂期 384  
 プロテスタント宮廷Ⅰ——カッセルとドレスデン、物の新しい秩序 388  
 プロテスタント宮廷Ⅱ——ベルリンとコペンハーゲン、博物館への道 396  
 コペンハーゲン 397／サンクトペテルブルク——ロシアのクンストカメラ 401

10 自然史——陳列室から博物館へ 405

オランダ——異国的なものと非常に身近なもの 407／アムステルダム植物園 408  
 ヤン・スワメルダムの昆虫標本 410／フレデリック・ルイシュの解剖学的標本 411  
 ゲオルク・エヴァーハルト・ルンフィウスの海洋生物 411  
 イギリス、フランス、ヨーロッパ——流行、農村経済、神学の狭間で 414  
 アシユモレアン博物館 416／科学と宗教の次元 419／自然史博物館——啓蒙主義の一施設 422  
 ビュフォンとパリの王立植物園 424／大英博物館とハンス・スローン卿 429／自然史博物館の設立 431

11 美術館へ向けて 437

イギリス国王チャールズ一世とその側近たち——絶対主義貴族の特権としての芸術 437  
 売却されたコレクション 440／フランス——王室コレクションから美術館へ 442  
 コレクションの質的变化 444／新しい紳士像 446／公衆と公共性の概念 451  
 ミュゼとギャラリー 452／イギリスにおける美術の興隆 454  
 スペイン継承戦争の影響——オランダとそのほかのヨーロッパ諸国 457  
 スウェーデンとデンマークの王侯貴族 458／紳士像と騎士道学 459  
 華やかなザクセン——作品、建物、公衆 461／フリードリヒ二世 469  
 王侯貴族の絵画・古代美術のカタログ 471／コレクションの開放 472  
 美術館の絵画作品吊り下げの新原則 477／「除外の原則」と美的原則 478

訳者あとがき 水嶋英治 488

図版出典 503  
 参考文献 544  
 原注 609  
 博物館・美術館の関連地名・施設名索引 612  
 人名索引 620  
 続刊の概要 621

第Ⅱ部

個人コレクション  
三つの誕生物語

Les trois naissances de la collection particulière



## 1 宝物の時代——墳墓、寺院、宮殿

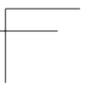


カイロのエジプト考古学博物館、パリのルーブル美術館、ロンドンの大英博物館をはじめ、世界中の多くの博物館には、アラオとその後継者の墓から持ち出された豊かな調度品が展示されている。しかし、仮に、それらの調度品が考古学博物館・美術館に存在しなかったとすれば、一体どうなってしまうのだろうか。あるいは、イラク戦争による略奪前のバグダッド博物館、また、ウル、シユメール、バビロンの王たちの墓から発見された考古的資料がルーブル美術館や大英博物館に展示されていないかつたとすれば、どうなっただろうか？ スキタイ〔ユーラシヤ内陸の騎馬遊牧民〕の王侯の墓から発見された素晴らしいコレクションが存在しなければ、エルミタージュ美術館はどれほど貧しくなっていたことだろう。メソアメリカやアンデス諸国の偉大な博物館は、アステカ、マヤ、インカなど有名な民族の墓の中身を明らかにした発掘調査の成果なしにはどうなっていたことか、想像もつかないだろう。

### 宝物と聖なるもの

こうしたリストはもつと長くなる可能性がある。神々とまではいかなくとも、一般に神と人間の接点に位置する最高権力者が死後の世界へ行く時に同行するとされる品々、さらには妻や召使い、馬とともに埋葬するという習慣は、普遍的ではないものの、旧世界と新世界で非常に広く行われていた。また、最高権力者を頂点とする階層ヒエラルキの上位者にも、より控えめな形で同じ慣習が適用されていた。確かに、空気中で腐敗させたり、水に浸したり、遺品をすべて火葬したりして、死者の遺体を儀式的に破壊する習慣と競合していたのも事実である。とはいえ、こうした習慣は墓に埋葬されるよりもはるかに一般的ではなく、痕跡もほとんど残っていないため、ここでは取り上げないことにしよう。

私たちの美術館・考古学博物館は、古い墓墳の継承者である。そのため、博物館は古代の宝物を受け継ぐ者でもあるのだ。誤解を避けるために最初にはつきりさせておきたいのは、私たち



が関心を持つ「宝物」は、今述べたような意味でのコレクションとしての宝物であり、小麦置場、建築材料や実用的な原材料の倉庫、武器や道具の貯蔵所など、ある種の古代言語で「宝物」という言葉に相当するものを除いたものである。それに対して、葬祭用家具<sup>(※1)</sup>は、完全に私たちの範囲内である。墓に納める前に、数百個にも及ぶ緻密な細工が施されたこれらの家具の一連の集合体は、長い年月をかけて製作され、蓄積されたものである。この間、将来の葬祭用家具は、おそらく当初は神殿でもあった宮殿に保管され、来世への旅立ちのための品々とその製造に不可欠な重要資材の保存に適した空間が確保されなければならなかった。金、銀、青銅、真珠、翡翠、斑岩、大理石、象牙、貝、貴石、水晶、琥珀、外国産の木材、羽毛、ダチョウの卵、角、ココナッツ、皮革、仕上げ加工された織物……など。種目は場所や時代によって異なるが、いつでもどこでも入手や加工が困難な珍しい素材、色や形、透明度、輝きなど、通常の素材とは対照的で印象的な素材である。この地球上ではなく、あの世からやってきた、その住人によって意味を与えられた特別なものを扱っているという確信を与えてくれるものである。神聖な君主が人間の中にいるのと同じように、物質の中にも例外的な位置づけがある。それを利用して、最高権力者の日常生活に寄り添い、死後も君主に従うに値するものをつくることが意図されていた。

ツタンカーメンはラムセス二世のような体格にはほど遠かった。宝物庫は古代メソポタミア、古代中国「<sup>(4)</sup>」<sup>(1)</sup>「<sup>(2)</sup>」<sup>(2)</sup>、規模は小さいがスキタイやケルトに見られる「<sup>(4)</sup>」<sup>(4)</sup>「<sup>(5)</sup>」<sup>(5)</sup>。

このように宝物は、現世と来世、人間界と神々の世界を結ぶ交流の一部なのである。宝物を構成する品々は、原則としてこの枠の中に収めなければならない。葬祭用家具は、重い南京錠のついた扉、古墳、武装した警備員、強力な呪いなどによって、場合によっては保護される。しかし、効果はなかった。墓荒らしは、わずかな力の弱さにつけ込んで、中身を奪っていくのである。

この最初の機能は、すぐに別の機能で補われることになった。既に古代メソポタミアでは、王の宝物庫は、王がその功労に報いるために土地や奴隷とともに使用人に分配する物納庫の役割を果たしていた。ファラオ時代のエジプトでも同様だった。したがって、これらの品々は、現世と来世の間で交換されるのではなく、人と人との間で交換されたのである。同様に、衣服の生地や色、髪型やかつら、整えられた、時には染められたひげ、外見全般、宝飾品——杖、ネックレス、腕輪、トルク「<sup>(1)</sup>」<sup>(1)</sup>が使用した細目のある金属製首輪、胸飾り、指輪、ファイブラ、耳飾りなどは、着用者の占める地位、王の身辺への近さの大きさをただちに明らかにするものである。また、その由来から他の貴重品と同様に、王室の庇護の下で時間をかけて蓄積され、所有者と

神格化された人間であれ、人間の姿をした神であれ、もともと王の住居には「目に見えない」神が祀られており、死んだ王は地下やその近辺に埋葬されたと推測できる。そのため、王の生涯と死後、神の崇拜の必要性を満たしながら王に仕えた宝物庫は、王を取り囲んでいたものとは異なる場合、それはひとつだけ存在したのだった。その後、文明によって異なるが、王の住居と目に見えない神の住居である宮殿や神殿が分離され、王の墓はその保護が保証されると信じられるネクロポリス「<sup>(1)</sup>」<sup>(1)</sup>に移動されるようになった。その結果、宝物も分割された。それ以降、宮廷の宝と寺院の宝が存在し、時代とともにその内容や機能が分化していった。

### 宝物庫の機能

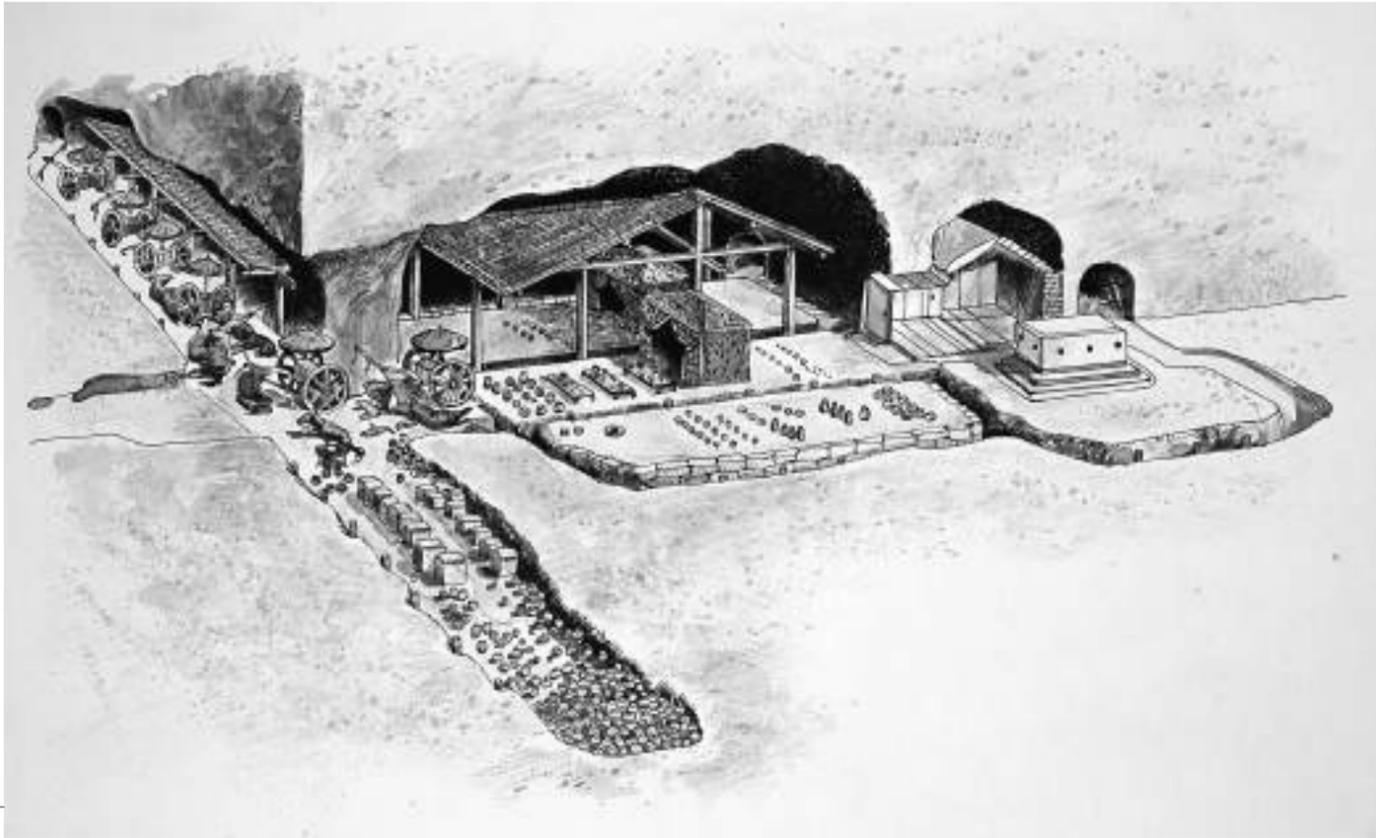
王宮の宝物庫の主たる役割は、神聖な君主の生活物質的な環境と、その死後、君主と一緒に墓に入るための物自体を生産するための材料貯蔵庫として機能することであつたと思われる。古代エジプトでは、ファラオの墓の中で唯一、大きな損傷もなく、葬祭用家具、ひいては財宝の驚異的な豊かさが明らかになつたのが、ツタンカーメン「<sup>(1)</sup>」<sup>(1)</sup>の墓だった。

ともに黄泉の国へ、それ以外は世代を超えて受け継がれていく宝物でもあつた。必要であれば、貴重な物資と交換することも可能である。これが、装飾の仕組みと、数世紀後に現れる通貨となるものの起源であつた。

神々の慈悲の証である宝物は、その所有者がこの世で超人的な存在であることを示している。宝物の中にあるものは、真の意味で王たちを輝かせ、その対象や敵の目をまどわせ、その姿から敬意を払わせることができるのである。もし地上の所有者が、たとえ一部であつてもそれを元の神々に返す義務があるならば、その間、彼らは物質的な財や、普通の人間より高い報酬を与えて、下僕を引き寄せるためにそれを使う権利がある。したがって、宝物は権力行使のための主要な道具のひとつである。またそれは、宝物なくして最高権力は存在しないという、神の選定の「目に見える」印でもあるのである。だから戦争の目的のひとつは敵の財宝を奪うことであり、この目的が達成されな

〔※1〕 広義には副葬品のこと。死者を埋葬する際に、墓内に副葬された可動物の総称。死者が生前に使用したり、所有していた物、衣服、装身具、武器、容器、調度品の類で、送葬儀礼に使用した祭器を含む場合もある。埋葬用に特別につくられた家具や死後の世界で使用するためと考えられる物もある。

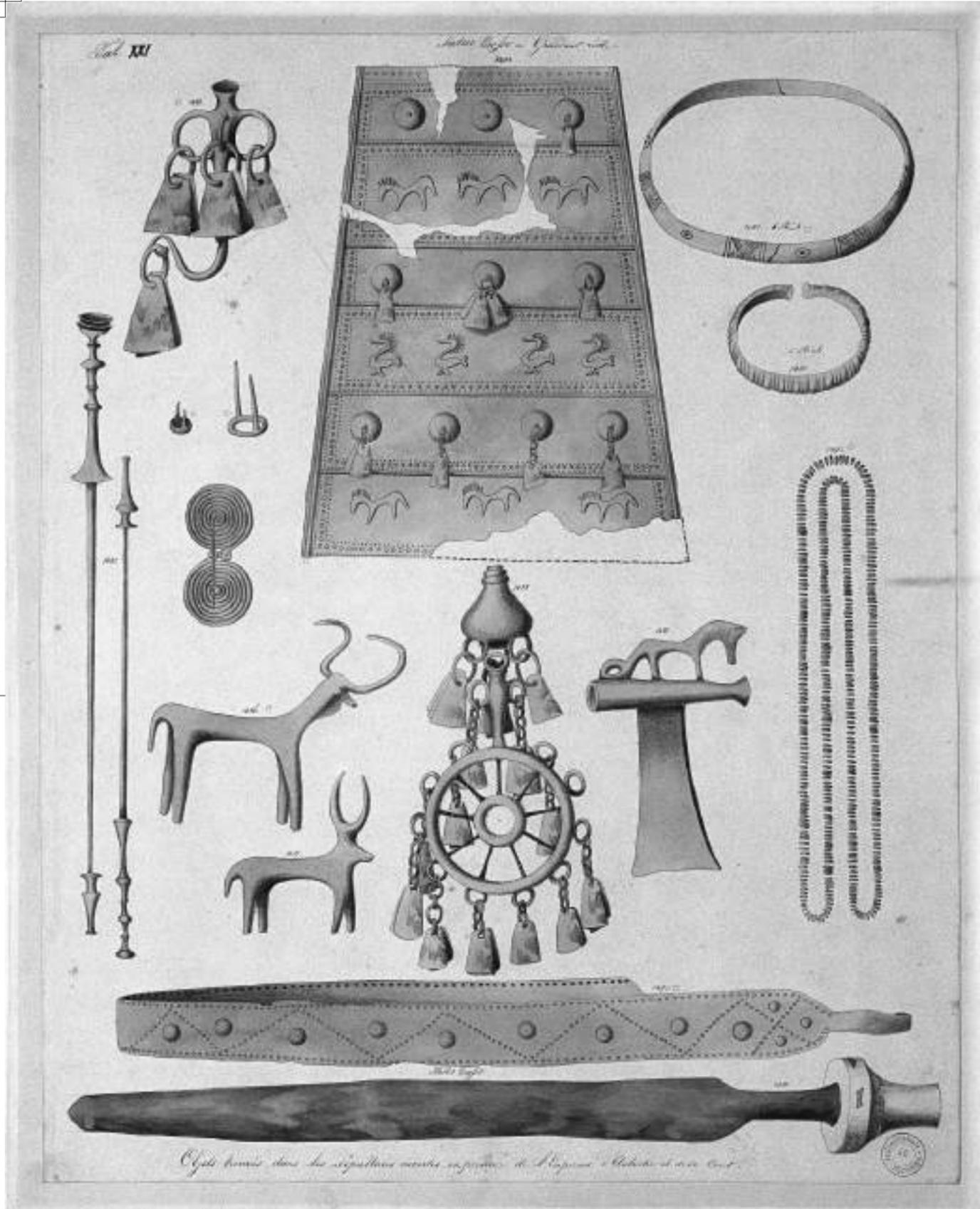
〔※2〕 ファイブラは、古代ギリシャ、ローマ帝国などの男女が衣服を留める時に使ったブローチのこと。ファイビュール。まっすぐな留め針に代わって、紀元前一四世紀頃から登場した青銅など金属でできた長さ一〇センチ程度のいわゆる安全ピン。



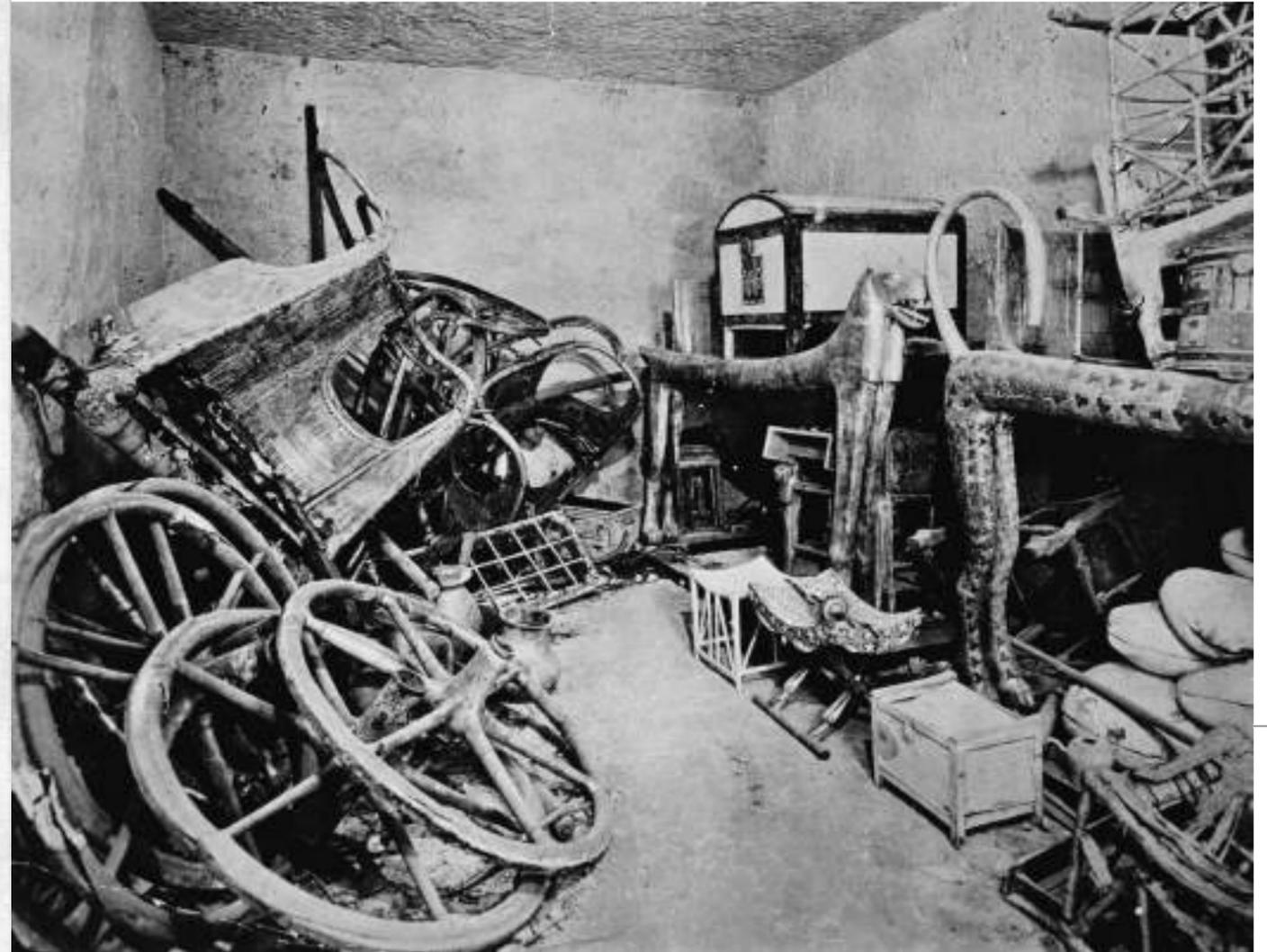
[図2] 中国河北省満城遺跡にある劉勝の墓地

[図1] 劉勝陵の中央(前154-113年)、中国河北省満城漢墓。1968年の発掘調査時に撮影された写真





【図4】イシドール・ヘンゲル『第1回発掘調査図版集』、ゲオルク・ラムサウアーが1846年から1863年にかけてハルシュタット(オーストリア)で発掘調査を行った(musée d'Archéologie nationale et domaine national de Saint-Germain-en-Laye)



【図3】ハリー・バートンとハワード・カーターによるツタンカーメンの財宝発見(1922年)。エジプト、王家の谷の墓の控えの間の様子



【図5】ハルシュタットのネクロポリス（紀元前5世紀）、507号墓地から出土した青銅製雄牛（Naturhistorisches Museum, Vienne）

いと勝利はないのである。アッシリアの王セナケリブ〔前七〇五  
六八  
一、アッシリアの王サルゴン二世の子、  
エルサレムを包圍しバビロンを破壊した〕の年代記には、バビロニアの王に  
対する勝利が次のように記されている。

「私はバビロンの宮殿に入り、彼らの宝物庫を開けた。私は宮  
殿から金、銀、金銀の容器、宝石、その他の貴重品、財産を戦  
利品として奪った」<sup>⑨</sup>

寺院は、その信仰と同様に多様である。特にユダヤの神殿は、  
多神教の神殿とは多くの点で異なっている。とはいっても、の、  
彼らの宝物は構成も機能も似ている。いずれも、物質的な品々、  
特に穀物や建築資材のほかに、インシグナ 鑄塊や立体作品の形で金や銀を  
含み、時には宝石で飾られ、貴重な布や衣、壺、祭具、燭台や  
ランプ台、テーブル、寝台などの家具があった。多神教徒の寺  
院では、青銅や石の彫刻、絵画、遺物などが加えられた。宮廷  
の宝物庫とは異なり、寺院の宝物庫は主に偉人や王を含む信者  
の寄付によって潤っていた。

このように、宮廷の宝物とは異なる形で、人の世と神の世と  
の交流に組み込まれていったのである。寺院の宝物庫に収納さ  
れることによって、その品々は崇拜の対象となり、永遠にその  
所有物となる。エジプトでもメソポタミアでも定期的に目録化  
され、それぞれの物品材質や状態などが詳しく説明されている。<sup>⑩</sup>  
僧侶は一定の条件の下で、宝物庫にあるものを寺院のために使  
うことができたが、使用人への報酬や葬儀用の調度品には使わ

れない。戦争の脅威と、その資金調達や貢ぎ物のために王が財  
宝を没収すること、さらに悪いことには、勝者がその財宝を横  
取りすることだけが独占されていた。<sup>⑪</sup> 時代錯誤的な言い方をす  
れば、王宮の宝物庫が王の私有財産であるのに対して、寺院の  
宝物庫は大きな災害があった時に引き出せる一種の公的な倉庫  
であったといえるだろう。

### 宝物庫の本質的特徴

宝物庫は空間的・時間的な広がりを持ち、同様に多様化して  
いるが、それらに共通し、また特定のタイプのコレクションと  
して構成可能な特徴を見出すことができる。その中で、まず本  
質的な特徴は、宝物の来世への志向性、いわば来世と下界の交  
換に従属することである。人間が神々に、あるいは神に対する  
感謝の気持ちを表すことができるような物品を、いつでも、ど  
こでも提供している。このように、それぞれの宝物庫は、崇拜  
や儀式のために一時的に、あるいは何らかの形で来世に送るた  
めに永久に保管され、取り出される蔵すたのようなものであった。  
一神教の影響でこの習慣が廃すたれても、王侯の宝物庫には武器や  
行進用の鎧よろい、タペストリー〔壁掛け用織物。羊毛や絹、麻などを材  
料として絵模様を織り出したつづら織〕、宝石、

金や銀の食器など、君主と神への感謝を表す厳粛で特別な状況で使用されるものが含まれていた。そして、キリスト教世界では、教会宝物のように、聖遺物箱（聖遺物箱）の中の聖遺物、典礼用具と聖像を保管する。聖像とはすなわち、花瓶、祭壇飾り、聖体顯示台（モンストランス）、聖体箱など、聖なる図像をも含む。このように、宝物はその歴史の中で、神聖なものとの結びつきを明らかにしてきたのである。

上に述べてきたことは、宝物の内容を規定するものである。しかし、宝物が主にその材料に起因する稀少性を持つもので構成されていることを示すため、強調しておかなければならないことがある。金、銀、青銅、寶石、水晶、硬石（班岩、翡翠）や光石（大理石、雪花石膏（アラバスター））、驚くような形をした貝、目を引く羽毛、加工が難しい木材などである。色、薫香（クンクウ）、珍しい角、象牙、特別に上質な布、特に濃い色（紫、藍）で染められた布など——これらすべてが宝物庫の中にあつた。出来栄は受け取る側の品格に見合うものでなければならぬ。だが、素材と比べると出来栄は長い間重要視されなかった。宝物とは、一般的に死後の世界との関連が明らかで、特別な性質を持つ素材でつくられた物品のコレクションを指す。例外はギリシャの英雄の聖遺物とキリスト教世界の聖人の聖遺物だけである。後者は、平凡な外見に隠された優美さを備えている。そのため、目に見えるような華麗な聖遺物箱に納められているのである。

い価値あるものを供給する責任を負っていたのは、蒐集家ではなく、公務員であり、彼らの務めであつた。つまり、素材を知り、それを評価し、作品を完成させた職人の技を評価することであり、後述するように、職人と個人的な関係を築くことではなかった。

紀元前六世紀末の硬貨の発明は、宝物の歴史に新しい時代を開いた。それはやがて、その構成と機能に変化をもたらし、空間的な組織にも影響を及ぼした。宝物庫は大きくふたつに分かれ、ひとつは物をつくるための材料が入つたもの、もうひとつは硬貨が入つたものであつた。

前者は、典礼または儀式の機能を持っている。その内容は、現世と来世の交流の一部であり、葬列、戴冠式、結婚式、その他の大きな祭典の際に、普通の人間に示されるものである。

後者は、経済的機能を持っている。金貨や銀貨によって賄われる買物、長い間、遠くから運ばれてくる産物や土地、貴重な材料に限られていたとしても、それは人間同士の交流に活気を与えるものである。少額の取引に使われる銅銭ならば、なおさらである。

二〇〇〇年以上もの間、経済は典礼や儀式、派手な目的のために従属したままだった。投資対象は主に物質的な財の生産ではなく、慈悲が保証されたあの世の住人に向けられ、戦争にも重要な程度に向けられた。経済的な機能が解放され始めたのは

また、一神教徒がこれらの慣習を放棄したあとは、行列や野外での儀式で風雨にさらされた。松明やろうそくの煙にさらされ、信者が触れたり口づけしたりすることによって、徐々に壊れていくのである。また、宗教的祭祀（カルト）にふさわしくないとと思われるものは修理され、破壊されても、その時代の流行に合ったものに取り換えられる。貴金属製であれば、宝物の一部である物体は、実用的な活動の回路から決定的に排除されることはない。溶かして別の物の原料にしたり、貨幣を鑄造したりすると元の回路に戻ってくる。典礼、式典、儀式用であっても、常に使い続けられる。そのため、傷ついたり、変色したり、壊れたりしても不思議ではなく、遅かれ早かれ、より用途に適した別の物に置き換えられることになる。宝物は物体の一部であり、本来、それ自体が目的ではなく、手段なのだ。

宝物の内容、蒐集場所、果たすべき役割、これらすべての具体的な特徴に加え、「蒐集家のいないコレクション」という類まれな特徴がある。宝物の持ち主は、その中に入っている物に興味を持つかも知れないし、一部の物の外観に喜びを感じるかも知れない。このような事例は知られているが、極めて稀である。古代や中世の宝物庫の多くは——王政、都市、聖域、修道院、司教や高位聖職者の宮廷など——ある組織が日常的に、あるいは例外的に、宝物庫なしには成り立たないために形成され、充実したものとなつていった。宝物庫を管理し、監督し、新し

紀元一六世紀以降である。そのため、約二世紀でコレクションの一種としての宝物は消滅した。「宝物」という用語の意味も変化した。予備的な支払い手段や、死後の世界と関係があるからではなく、いつでも多額の金銭と交換するために価値がある、物品のコレクションを指すように変化したのである。

### ギリシャの都市の宝物

ハインリッヒ・シュリーマンの調査結果から判断すると、トローアス（トロイア）やミケーネの財宝は、当時のメソポタミアやエジプトの財宝と類似していた<sup>1)</sup>。しかし、ヘロドトス（四〇〇年代）とパウサニアス（二〇〇年代）<sup>2)</sup>「古代ギリシャの旅行家、近東地方（著）」の間の時代においては、ギリシャの財宝は、都市国家と神聖君主制のように、近東の財宝とは異なつていた。コレクションは——その内容、蓄積の仕方、保管場所、果たすべき機能、分類や展示方法など——それらが形成されている社会の政治

〔※1〕聖遺物はカトリック教会で認められた聖者の遺骸の一部またはその着衣や持ち物に対する尊称。聖遺物は聖遺物箱（容器）に収納される。聖遺物箱は室内に安置されるもののほかに携帯可能な聖遺物容器も存在する。

的・法的体制や、一般的な信条を表現している。また、コレクションはそれらとともに変化していくものである。

ギリシャでは、どの街にも宝物庫があった。中には宝物庫を複数持っている人もいた。紀元前七世紀末にコリント人がデルフィの汎神殿（はんしんてん）に宝物庫を建設したあと、アテネ人の宝物庫など、新たに追加された。全部で二〇数種類ある。オリンピアの汎神殿にも、都市の宝物庫がつくられた。しかし、その中身は公開されていなかったようで、普段はともきれいな外観を眺めるだけである。このように、遠くから運ばれてきた大理石でつくられたデルフィの宝物は、それらが属する都市の壮大さを示すために、豊かな装飾が施されていたのである。

しかし、定期的に作成され、石に刻まれた目録によって、宝物の中身を知ることができる。そのため、収蔵されていた優れた品々や寄贈者の名前もわかっている。デルフィやオリンピアなどの汎ヘレニズム的な神殿の宝物は、その建築を通して都市間の競争に参加し、そこに集積された品々は各都市のエリートたちの敬虔さと寛大さ、不可分の愛国心と宗教心の対立を物語っていた。<sup>(13)</sup>税金や十分の一税（大きな収入を得た時、教会や領主に納めた、古代ギリシャの習慣。「十分の一奉納」とも）、貢物や戦利品によって賄われる神殿の宝物には——信心と謝意の表れである——無数の供物が集められ、その内容は時代とともに変化し、寄贈者の富と寛大さによって価値が決まるのだった。最も多かった個人のほか、ギリシャの都市、外国の王、そ

他の華やかで印象的な人物もいた。彼らの贈物は、神殿が時代とともに影響力を持ち、権力者や金持ち、ギリシヤ人や異国人、さらには、ギリシヤ神話に出てくるヒュベルレイオス人（北の果てに住み、太陽神アポロの供物を集める力があつたことを示している。一度奉納された供物は永遠に神々の所有物となり、厳格な手続きを経なければ神殿を出ることができない。また、貴金属は丁寧を集められ、溶かされて金塊にされた。）、大理石やブロンズ像、さらには象牙や金、三脚台座（巫女が座を告げた三脚床）、釜、壺、武器、さまざまな道具、布、陶磁器……。そして、時を経て、作品や金塊、硬貨という形で大量の貴金属が寺院に蓄積された。汎神殿を除けば、神殿の宝物は都市の宝物として、民衆が困窮した時に呼び出すことができるものであつた。ペロポネソス戦争（紀元前四三—四〇四年）の際、ペリ

クレス（アテネの政治家。民）は、都市の宝を守る必要性を人々に再認識させるため、これを使うことにした。アクロポリスに保管されていた六〇〇〇タレントの銀、「個人や国家が行った供物から得られた貨幣にならない金と銀、行列や競技に使われた神聖な品々、メディアア王国（古代西アジア）からの戦利品、その他同種の資源」、ほかの神殿の預金、さらには黄金のアテナ像もあつた。「もしもこの金を公共のために使うとしたら、あとで必ず全部取り戻さなければならない」と彼はつけ加えた。<sup>(17)</sup>

神殿の財産は羨望的となり、しばしば略奪された。アテネ

の暴君ラチャレは「アクロポリスから黄金の盾を盗み、アテナ

像の装飾を引き剥がした」という。パウサニアスは、神話の時代から、ネロ、クセルクセス（アケメネス朝）、ポーカイア人（シアアの古代都市）、ガリア人を経て、デルフィの財宝を略奪しようとするさまざまな試みを行い、一部は成功した。<sup>(19)</sup>ほかの神殿も、ギリシヤ同士の戦争によりひどい扱いを受けた。その後、ローマ帝国がギリシヤや東洋を征服したことで、神殿は被害を受け、その一部は修復されなかった。<sup>(20)</sup>平時には、その富によって寺院は有利子貸付を行うことができ、銀行としての役割を果たした。<sup>(21)</sup>歴史学者フランソワ・バラットは、「神殿の宝物は、宗教的動機と政治的動機、本当の信仰と不敬な考察が密接に混ざり合っている」と、宝物の持つ根本的かつ逆説的な両義性を定義している。<sup>(22)</sup>

しかし、日常的には、人々は祈り、犠牲を捧げ、神託を問ひ、そこに祀られている神の好意を引き寄せるために、自ら供物を捧げに神殿を訪れた。タキトゥス（帝政期ローマの政治家・歴史家）は次のように記している。若き日のティトゥスはシリアに向かう途中で「地元の人々や外国人の間で有名だったパフォスのヴィーナス神殿を訪ねたくなった」。このようにタキトゥスはこの神殿に関する伝承に触れ、女神の像について次のように述べている。

「ティトゥスは、王たちの富と供物、そして古代を非常に好むギリシヤ人が不確かなほど遠い時代のものとするあらゆるもの

を熟考したあと、まず自分の航海について神託を問うた」

そして次のように続けた。「多くのいけにえを捧げたあと、自分の将来について問いかけた」と。<sup>(23)</sup>

ティトゥスは確かに一般人の人ではなかった。けれども、旅人としてまた同時に信者としての彼の行動は、長い期間ではないにせよ、彼の時代に神殿を訪れた何千人もの訪問者の代表的な行動とみなすことができる。

寺院は、信仰を捧げるためだけの場所ではなかった。訪問者が有名芸術家の彫像作品や絵画を鑑賞し、長い時間をかけて蓄積された数々の品々に驚き、最も印象的な表現形式や、神話、歴史に登場する人物や出来事を連想させるものの前で足を止め、訪れた人々に適応していた場所でもあつた。

野外空間は彫刻の庭となり、内部には祭壇や奉納物の柵、食卓が置かれ、供物が床に積まれた。これらの食卓のひとつは、フランス国立図書館の硬貨メダイユ古代美術品部門（注）に所蔵され

〔※1〕ローマのパラティヌスの丘近くにローマ皇帝ハドリアヌスによって一八八頃着工、一二五—一二八頃完成した神殿。万神殿（ばんしんてん）ともいう。パンテオンの意。

〔※2〕ティトゥスは在位七九—八一年のローマ皇帝。七九年のヴェスヴィオ火山の噴火などの災害に際し、罹災者救済に努め人類の寵児と称えられた。

〔※3〕パフォスはキプロス島南西部の地中海に臨む古代都市。神話では美と愛の女神アフロディテ（ローマ神話のヴィーナス）が海の泡から生まれた地。

ている、いわゆる「プロトレマイオスの聖杯」にも見ることができ「[図6](#)」「[図7](#)」……。また、寺院の中には、本来別の目的のために建てられた建物を、奉納された絵画の所蔵のために確保したものがあった。私たちはそれを「ピナコテーク」〔（絵画）〕と呼んだのである。ストラボン（※1）によれば、サモス島の「ヘライオン」〔（ヘラ）〕がそれであり、同様に、アテネのアクロポリス入口にある部屋は絵画の保管場所として使われていた。（26）

ギリシャの神殿では、硬貨や鑄塊の貴金属を除いて、見学者が見られるように展示されていたが、それらはオピストドムス〔（古代ギリシャ神殿の後部にあった宝物庫）〕という堅牢な部屋に閉じ込められていることが多かった。（27） 神殿の機能のひとつは、彫像や絵画のように、「目に見えない」神の姿を心にとどめ、遺物のように「不確かであるほど遠い」時代の英雄や功績の物語を見た者の記憶と結びつけることができるものを展示することだった。（28） この点、ギリシャやローマの神殿は、これまでも何度か指摘されているように、私たちの博物館と似ている。しかし、神殿は博物館ではない。両者は同じように銀行としての機能を持つことは、両者の原則の違いを示すのに十分であろうが、この点については、またのちほど述べることにしたい。

汎神殿の宝物という特殊な例に関連して、ギリシャの各都市間、あるいは各都市内の市民間の信心と富の過多については既に述べた通りである。しかし、競争はギリシャの公共生活のあ

らゆる分野を特徴づけていた。それは、都市や個人が他者に対する優位性を顕著に主張し、それを全世界に知らしめたいという強い欲求と密接に関係していたのである。（29） この栄光の追求は、政治や戦争だけでなく、芸術や知的な生活も、オリンピックに似た一種の闘争的ゲームに変えてしまった。余談になるが、騎士道精神を刺激したあと、一四世紀以降、古代の伝統と同化した芸術家や王侯の主要な動機は再び栄光を追求することとなった。とりわけ、コレクションや博物館の設立競争へと駆り立てた。この点についてはまた、何度か述べることになるだろう。

### ヘレニズムの王たち

アレクサンドロス以降、都市国家の独立が終焉し、それに伴って都市国家は君主制に組み込まれた。その結果、ギリシャ人の社会生活様式に内在する対抗意識がより高い次元に引き上げ

〔※1〕ストラボン（紀元前六三—二三）は小アジアのポントス出身の古代ローマ時代のギリシャ人地理学者・歴史家。言語・教育の面ではギリシャ人であるが、紀元前四四年頃ローマに勉学に行き、ペリパトス学派からストア学派に転じた。ギリシャ、エジプトなど各地を旅行した。彼が書いた四七巻の歴史書は散逸したが、一七巻の『地理書』はほぼ伝わっている。



〔[図6](#)〕〔[図7](#)〕プロトレマイオスの聖杯。ディオニュソスの儀式的準備風景が描かれている。前1世紀。ローマに渡ったヘレニズム時代の王の宝物から、9世紀にシャルル1世がサン・ドニ修道院に寄贈。典礼に使用され、1791年にメダイユ陳列室に移されたあと盗まれた。その後、カロリング時代の台座がない状態で発見された。このサードニクス製の壺は、「宝物」から「博物館」まで西洋のコレクション史を物語っている（Bibliothèque nationale de France, Département des monnaies, médailles et antiques, Paris）